

胡振平 主编

第 6 册

现代 日本 语



上海外语教育出版社



胡振平 主编

第**6**册

现代

日语

WJ
外教社

上海外语教育出版社

图书在版编目(CIP)数据

现代日本语. 第六册 / 胡振平主编. — 上海: 上海外语教育出版社, 2003

ISBN 7-81080-423-5

I. 现… II. 胡… III. 日语-高等学校-教材
IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2002) 第 017536 号

主 编 胡振平
副主编 肖传国 王军彦 姚灯镇
许宗华 臧运发
编 者 (以姓氏笔划为序)
马兰英 王军彦 许宗华
李先瑞 李 伟 何建军
肖传国 吴 宏 张苏芸
胡振平 姚灯镇 贾友江
徐 卫 盛文忠 臧运发

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机), 35051812 (发行部)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 上海市印刷四厂
经 销: 新华书店上海发行所
开 本: 890×1240 1/32 印张 7 字数 235 千字
版 次: 2003 年 10 月第 1 版 2003 年 10 月第 1 次印刷
印 数: 5 000 册

书 号: ISBN 7-81080-423-5 / H · 172

定 价: 8.50 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

前 言

《现代日本语》是高等院校日语专业使用的精读教材,是高等院校外语专业面向 21 世纪教学内容和课程体系改革的立项课题,属于教育部科研项目。本教材内容充分反映快速变化中的时代,有助于学生素质的培养;外语知识、语言训练和相关知识有机结合,处置合理;教材的框架设计、布局结构有助于提高学生的思维创造能力及鉴赏能力;在注意传授基础知识的同时,充分考虑到内容的实用性、针对性和科学性。

《现代日本语》共 6 册(另附 1 册课文练习参考答案),即基础阶段 4 册,高年级阶段 2 册。前 4 册每课由会话、课文、单词、语法、练习、语言文化之窗等部分构成,单词、语法及语言文化之窗均用汉语注释或解说。第 5、6 册每课由课文、单词、语法、练习、语言文化广场等部分构成,单词、语法及语言文化广场部分均改用日语注释或解说。为了给广大的学习者提供方便,我们编写了课文练习题的参考答案。

《现代日本语》课文题材多样,内容丰富。课文内容除传统的语言、文学之外,还包括充分反映快速变化时代的社会、文化、经济、外交、科技及计算机等内容。使学生在掌握语言知识、基本技能的同时,了解现代的日本社会。

根据教学大纲的要求,一年级应掌握词汇 2 300 个,二年级应掌握 3 200 个,本教材 1~4 册出现词汇约 5 500 个。5、6 册随着课文难度增大,词汇量递增。与其他课程配合,高年级掌握词汇量应达到 10 000 个左右,基础语法约 250 项,基本句型约 350 个,常用语法功能词约 110 个。本教材紧扣大纲要求并突出语言的交际功能,使学生学以致用,培养思维创造能力,提高语言交际能力。

练习部分充分考虑到读、听、说、写、译五种能力的全面发展,题型灵活多样并按单元配有综合练习题。

除语言文字的注释外,本教材还有针对性地对日语的特点、日本人的心理特征、日本的风俗习惯等文化背景知识作了简要注释和说明。

《现代日本语》的编写,较好地贯彻了日语教学大纲的精神,是高校日语专业一部理想的教材和参考书。

本教材配有日籍教师录制的磁带。

编 者

2003年4月

使用说明

本书为《现代日本语》第六册,供高等学校日语专业三年级学生第二学期使用。旨在帮助学生在练好日语的词汇、句型、语法等基本功的同时,着重培养学生的阅读、理解、翻译等综合技能。

本册共8课。每课由课文、生词、句型、语法、词语用法、练习及语言文化广场等部分组成,在本书最后附有单词索引、句型索引、语法索引、词语用法索引及参考译文。

本册编有370个常用生词、30个基本句型、15条基础语法。生词表中所注生词为课文中出现的单词,练习中的生词要求学生自己查出,以培养学生使用工具书的能力。课文均选自日文版原文(有的地方酌情删改),题材多样,内容丰富;句型多为常用例句;练习是培养学生综合能力的重要组成部分。为了配合学生参加国家教委组织的高校日语四、八级考试和日本国际交流基金组织的日语能力考试,除编入本课所学句型、语法、词语的练习外,还补充了与考试有关的句型、词语、惯用句、谚语等专项练习;阅读理解练习选自日本国语教材或日语能力考试题库;汉译日部分为成段文章,以培养学生通过上下文的语境综合分析、判断翻译大段文章的能力;语言文化广场是为学生更多地了解日本社会文化及语言知识而设。

每课课后都附有生词表,并标注了声调类型(大多是根据金田一春彦等编写的《新明解国语辞典》标注),所标词义为常用词义或本课出现的词义,〈 〉中的词语是词性的略语,分别为:

- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 〈名〉——名词 | 〈代〉——代(名)词 | 〈数〉——数词 |
| 〈形〉——形容词 | 〈形動〉——形容动词 | 〈動〉——动词 |
| 〈副〉——副词 | 〈接頭〉——接头词 | 〈接尾〉——接尾词 |

〈他〉——他动词

〈自〉——自动词

〈五〉——五段活用动词

〈上一〉——上一段活用动词

〈下一〉——下一段活用动词

〈サ〉——サ变活用动词

〈力〉——力变活用动词

〈感〉——感叹词

由于语法、句型讲解详细,课文也配有汉语译文,所以也适合自学者使用。



第一課 青春とは何か	1
新出単語	
文型	
文法	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第二課 動物たちの嘆き	21
新出単語	
文型	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第三課 民族と文化	41
新出単語	
文型	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	

第四課 陰影の美	66
新出単語	
文型	
文法	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第五課 日本人の思考方法	90
新出単語	
文型	
文法	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第六課 伊豆の踊子	116
新出単語	
文型	
文法	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第七課 短歌の鑑賞	135
新出単語	
文型	
文法	
言葉の使い方	
練習	
言語文化広場	
第八課 田舎ぶり	158
新出単語	

文型
文法
言葉の使い方
練習
言語文化広場

付 録	183
新出単語の索引	185
文型の索引	192
文法の索引	193
言葉の使い方の索引	194
本文の参考訳文	196

第一課

青春とは何か

恋愛、友情、苦悩、懷疑、そうした輪のひろがりの中に、われらの青春はある。今のわれわれの世代は、あらゆる可能性を秘めている。と同時に、悩み多き挫折の世代でもある。つまり、青春は、あらゆる可能性への挑戦と、その失敗に伴う挫折という要素を十分に備えているのだ。

白鳥は悲しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

青春の歌人、旅の歌人として知られる若山牧水の名歌であるが、この絵画的で、浪漫的哀感をたたえた歌を、ぼくは若者の姿の原点とみたいのである。白鳥はなぜ悲しいのか。作品から判断すれば、それは「空の青海のあを」にも染まることなく「ただよふ」ことのみしかできないからであろう。太陽の照り返しに光る海の青さ、澄み切った空の青さに同化されることなく、自らの白さを主張し続ける一羽の白鳥。一見、優雅であり、青と白というコントラストは唯美的景趣でもある。だが、そのなかに秘められた白鳥の必死の抵抗は、まさに悲しみの姿であろう。青い次元にただよう孤独感は、いいしれぬ寂しさであろう。この周囲の青さの中で、たったひとり隔離された孤独の中で、自らの「白」を必死に守り続けているのである。つまり、青春の原点とは、悲しみの中でも必死に孤独に耐え、抵抗を試みることなのである。

この場合、白鳥とは、どんよりと黒くよどんでいる社会の中にただよう現代の若者の象徴の姿であろう。鋭利な感覚を持つ若者も、一た

び社会に足を踏み入れることにより、傷つき、挫折し、胸ふくらませた青春の希望もつぶれてしまう結果になってしまうことが多い。このことは、しかし、若者の社会的適応性の欠如を批難するより、現代社会の画一的構造を批難するほうが正しいかもしれない。社会のこういった——同一型人間の量産体制——組織のなかにおいて、青春の孕む生命力などは、無用の長物なのである。社会の流れに無関心で、事からは無感動、そして生きること無気力な人間のほうが、大量生産には好都合なのである。独自性、主体性を喪失した若者は抵抗の必要がなく——いや、抵抗さえできず——青春を生きる「悲しみ」を知る由もない。まして、「シラケの時代」「三無主義」「四無主義」などと、マスコミがあたり立てるほど、青春を生きる若者は無気力を装い、シラケていることを粹だと思い、そうすることで、見失いかけた自分を保っているにすぎない。このようにして誇り高き青春のイメージは、現代では、若者たちの手により、もろくも崩れつつある。かつての若者は、「春風や闘志いだきて丘に立つ」と、青春のゆくえを睨み、その決意の堅さを示したものだっただけに。

牧水は青春の象徴を、白鳥のイメージで捉えたのであろう。白鳥——その色は潔癖を思わせ、その翼は自由の表象を受け取らせる。すなわち、青春の力とは、自由の分野を自分の意志で開拓して行くことだろう。それは、精神的もしくは物質的に自由なものへの追求であるにちがいない。青春＝自由の等式は、成り立たないかも知れないが、若者特有のがむしゃらな行動は、たとえそれが無益な追求であるにせよ、青春の持つ特権であるような気がする。優しいが故に傷つき、悲しみの中に浸るのも青春の特質であり、夢中になって何かを求め続けるのも、若さの威力なのである。これは、けっして相反する対照的な二面ではない。青春の両極は、逞しく交流して、感情の起伏の激しい若者の心の中で、さまざまな事がらとともに融合し、思春期の心と行動を支える大きな柱となっているのである。

新出単語

秘める[ひめる]②〈他下一〉

挫折[ざせつ]⑩〈名・自サ〉

染まる[そまる]⑩〈自五〉

浪漫的[ろうまんてき]①〈形動〉

原点[げんてん]①⑩〈名〉

照り返し[てりかえし]⑩〈名〉

コントラスト ④①〈名〉

唯美的[ゆいびてき]①〈形動〉

優雅[ゆうが]①〈名・形動〉

次元[じげん]⑩〈名〉

いいしれぬ[言い知れぬ]〈連語〉

隔離[かくり]①⑩〈名・他サ〉

よどむ[淀む]②⑩〈自五〉

適応性[てきおうせい]⑩〈名〉

鋭利[えいり]①〈名・形動〉

量産[りょうさん]⑩〈名・自サ〉

好都合[こうつごう]③〈名・形動〉

シラケ[白け]⑩〈名〉

あおり立てる[煽りたてる]⑤〈他下一〉

粹[いき]⑩〈名〉

睨む[にらむ]②〈他五〉

潔癖[けつぺき]⑩〈名・形動〉

内緒にする。

事業や計画などが途中でだめになること。

色が着く。染色される。

ロマン的。

そこから物事が出発した、基本となるところ。

照り返すこと、またその光。

対比、対照。

唯美的、耽美的。

上品でみやびやかなこと。

ものの見方や考え方の立場。

言葉で表せない。

隔たること。

河の流れがとどこおって水が溜まること。

外的な刺激や環境の変化に応じて、それにふさわしいように自分を変えていく性質・能力。

刃物などの刃が鋭く、切れ味のよいこと。

大量生産。

都合がよいこと。

何物にも無関心・無感動なこと。

激しく扇動する。

気性、態度、身なりがあか抜けしていて張りがあり、さっぱりしていて、自然な色気が感じられること。

厳しい目つきでじっと見る。

わずかな不潔でも許さない性質。

表象[ひょうしょう]⑩<名>	感覚の複合体として心に浮かべられる外的対象の像。
開拓[かいたく]⑩<名・他サ>	まだ手の付けられていない新しい分野や領域、あるいは人の進路や人生・能力などを切り開くこと。
等式[とうしき]⑩<名>	式や文字や数が等号で結ばれているもの。
がむしやら[我武者羅]⑩<名・形動>	一つの目的に向かって勢い込んで向う見ずにすること。
無益[むえき]①<名・形動>	役に立たないこと。
特権[とっけん]⑩<名>	特別の権利。
浸る[ひたる]⑩②<自五>	ある心理状態・境地に入りきる。
両極[りょうきょく]⑩<名>	両極端。
遅しい[たくましい]④<形>	目を見張るほど盛んである。
起伏[きふく]⑩<名・自サ>	勢いが盛んになったり衰えたりすること。
融合[ゆうごう]⑩<名・自サ>	とけあうこと。

文 型

(活用語連体形・体言)がゆえに……。

「が」は文語格助詞で、連体修飾格を示し、文語的な格調を添える。この文型は書き言葉として、「それが原因・理由となって」という意味を表す。

- 私は病気がゆえに大学卒業が一年遅れた。
- 外国人であるがゆえにそんな扱いを受けるのは残念である。
- 親が放任していたがゆえに非行に走る若者もいる。
- 山は高いがゆえに尊いのではなくて、木あるをもって尊しとするのである。
- 年は十五ばかりの孤児なるがゆえにかわいそうだと東京から連れて帰ってきた。

文 法

一、文語形容詞の活用

文語形容詞は口語形容詞と同じように語幹と語尾があるが、文語形容詞の活用語尾が「く」になるものと「しく」になるものがあり、前者をク活用(赤し、明るし、痛し、軽し、暗し、高し、良しなど)、後者をシク活用(忙し、正し、難し、欲し、珍しなど)という。ク活用の形容詞連体形は「き」で、シク活用の形容詞連体形は「しき」である。例えば：

	語 例	語 幹	連体形
ク 活 用	良し	よ	き
シク活用	美し	うつく	しき

- このごろは天気のよき時なり。＝このごろは天気のよい時だ。
- 日本には景色よきところ多し。＝日本には景色のよいところが多い。
- 花の美しき時は春なり。＝花の美しい時は春だ。
- 涼しき秋は来たれり。＝涼しい秋は来た。

二、間投助詞「や」

間投助詞は文節末に自由に付き、語勢を強めたり、それらに聞き手の注意を向けさせたり、念を押したり、感動や親しみを表したりする働きを有する。「や」は文語助詞として、口語助詞「よ」に当たる。

- ① 種々の語について相手に働き掛け、相手の気持ちを引き、また話し手の感動を伝える。
 - をかしの御髪(みぐし)や。＝いいおかみだこと。
 - 吉野の花も既に咲きたるぞや。＝吉野の花もすでに咲いたよ。
 - 続けやものども。＝お前たち、続けよ。

2 呼びかけの意を表す。

○ あが君や、いづかたにかおはしましぬる。＝わが君さまよ、どこにいらっしゃるのですか。

○ 朝臣(あそん)や、さやうの落葉をだに拾へ。＝朝臣よ、せめてそのような落葉でも拾え。

3 (俳句などで)音節数の足りない時に文節の後に入れて語調を整える語。切れ字の一つ。軽い感動の気持ちを添える。

○ 古池や蛙飛び込む水の音。＝古びた池がある。そこへ突然蛙が飛び込んだ音が小さく聞こえた。

○ この道や行く人なしに秋の暮れ。(芭蕉)＝秋の夕暮れ、この道へ行く人は一人もいない。

三、接続助詞「のに」

後の文を省略して、この助詞で言い指して、終助詞的に用いる。予想した結果とは食い違った結果になって残念だという気持ちを表す。話し手以外の人の行為に対して、非難や不満を表す場合にもよく用いられる。

○ あれほど注意しておいたのに。

○ いったいどこへ行ったんだろう。こんなにあちこち探しているのに。

○ スピードを出すから事故を起こしたんだ。ゆっくり走れと言っておいたのに。

○ お金が必要なら、貸してあげたのに。

○ あと5秒早ければ始発電車に間に合ったのに。

言葉の使い方

一、たたえる[称える](他一)

立派な行いや優れた人格などをほめる。

- 試合が終わると、選手たちの健闘を称えて、大きな拍手が送られた。
- その少女は母親の看病をしながら幼い弟たちの面倒を見、孝行娘と称えられている。
- この碑はおぼれかけた児童を救って死んだ教師の勇気を称えて建てられた。
- 市では、社会のために尽くした人たちの功労を称えて表彰します。

二、ひっし[必死]

死んでもかまわないほど全力でがんばる様子。

- 突然海に投げ出され、必死になって泳いだ。
- 小犬の速いことと云ったら、驚くほどで、ぼくが必死で走っても、追いつけそうにありません。
- 隣の部屋から、泣きながら抵抗する子供の必死の声が聞こえてくる。
- 戦いに出かける兵士たちには、すでに必死の覚悟ができていました。

三、ただよう[漂う]〈自五〉

- ① 空中や水面に浮かんで、あちこち揺れ動く。
 - 桜の木からひらひらと落ちた花びらは、いつまでも水面に漂っていました。
 - たんぽぽの綿毛は、世界一小さなパラシュートのように、広い空をどこまでも漂っていきました。
- ② ある雰囲気を感じられる。
 - パーティーの会場には、楽しそうな気分が漂っていた。
 - どういうわけか、今朝の教室には暗い雰囲気が漂っています。
- ③ あたりに匂いが広がる。